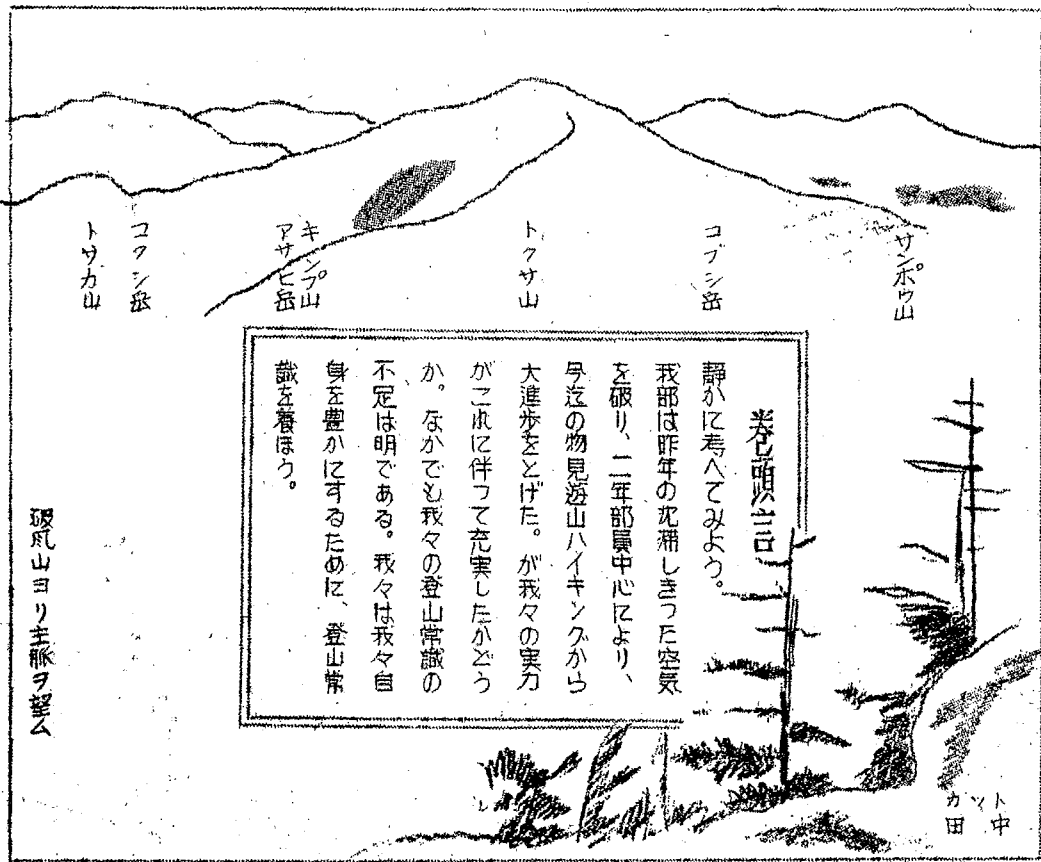


徬 徨

— 第 五 号 —

昭和 25 年 12 月

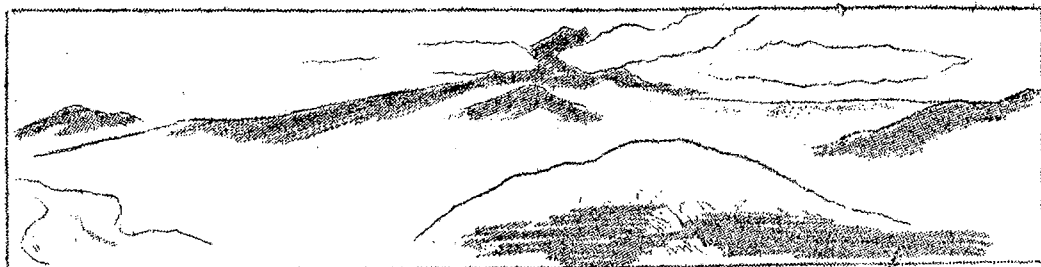


卷の頭言
 靜かに考へてみよう。
 我部は昨年の沈滞しきつた空気を破り、二年部員中心により、今迄の物見遊山ハイキングから大進歩をとげた。が我々の実力がこれに伴つて充実したかどうか。なかでも我々の登山常識の不足は明である。我々は我々自身を豊かにするために、登山常識を養はう。

破嵐山ヨリ主脈ヲ望ム

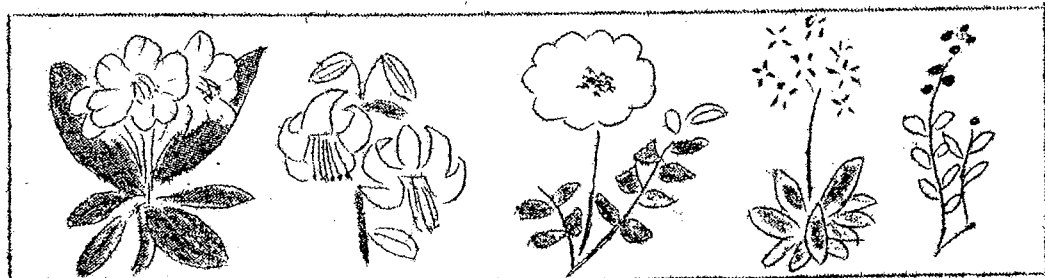
カマド中

都立西高等学校山岳部



目次

冬期山行計画	一
山行報告	一
佗人山行報告	三
詩 二 題	五
NONI SENCE	五
山の高低の見方	六
○PEAKの征服	六
○ヒマラヤへの尾根	六
○足もとに御注意	六
本年度記録集	七
会計報告	八
山麓通信―バス時刻表	八
部員移動	八
新委員紹介	八
部報告贈御礼	九
炉辺	九
あとがき	九



冬期山行計画

雲取山



期日 一月四日五日
 コース 三峰口→雲取小屋(泊)→雲取山→蕨ノ嶺山→氷川
 費用 四〇〇円程度
 装備 四ツ目アイゼン
 係 未定

丹沢主脈

期日 二月上旬
 詳細、追って通達

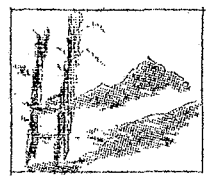
新ルート開拓大会

期日 一月二十一日(雨天中止)
 規定 1. 未紹介コースであること。
 2. 費用二百円程度であること。(割引使用可)
 3. パーティは三名以下のこと。
 4. 各パーティとも当日迄コースを発表しなすこと。
 5. 出承たし山行の証を持帰ること。

報告提出後局外看のみで、バスト三コースを選定、彷徨カ大号にて発表、費用半額又は全額及び記念品を贈る。

集會予告

期未考査終了後全要必ず二二教室に集會のこと。



山行報告

十三回例会 甲武信ヶ岳

期日 十月二十三日、二十四日
 参加者 CL田中(将)(2E)、SL村田(2D)山口(2A)長崎(2D)鈴木(2E)
 中野(2E)竹内(2E)岩崎(1E)加藤(1D)
 費用 川上・新宿一四〇、川上・坂持山六〇、堀山・新宿八〇、計二八〇。

行動経過

初日 晴

川上→梓山。故障したバスに代つたトラックにゆられ、紅葉に彩らぬ在り山を眺めながら、梓山白木屋の前でおろされる。
 八杉山→岩林窟。平坦な道である。荷が四貫足らずなので一応各自の調子を見る為と、日没が早いのを考慮してピッチをあげる。石楠花山岳会の指導標設置高であるが、鞍場ヶ原の姿がなすけなす。岩林窟は多数の人が入っているから万一の場合の避難に都合が良い。
 八丁坂。落葉松の登んだ真実が美しい。山口の調子悪く、としかく△の七・九より派出された尾根のとりつきで濃食とし、山口のハツクを中野に頼み、中野の荷を分解各自負担とする。
 八十文字峠。山口の状態ますます悪く、パーティの二分を強ひらぬ先登隊のしを村田とし長崎、鈴木、岩崎、加藤でパーティを編成日没前に小屋に至った。十分後、後登隊田中、山口、中野、竹内のオ・ターで出承るだけ整理のなり水に登始める。梅の衆生林だけは暗川環頭におとらぬ美しきを見せり。

△大山▽ 山口非常に苦しそう。岩間のつらうらに気温の降下を驚く。
武信白岩山、秩父側上昇気流のすくく日は傾いて来た。鞍部で先発隊を落伍した鈴木を加えてますます難行。相渡らず有生林が美しい。側水は切開かれていた。

△三室山▽ 登りに山口の体餘々に改復に向つて全員の長びの色が見えたが鈴木は疲勞甚しくビツチは相渡らず登り。側水少々あり。五時五分頂上着。日没となりあわてて甲武信に向う。山口の調子良くなつて鈴木は荷を持って行く。暗の中を進む。鈴木の外にも疲勞甚だしいものがある。ただ先発の応援が望まれる。甲武信との鞍部で左に沢徑を分つのがやうやく判別出来る。

△甲武信ヶ岳▽ 小屋

甲武信頂上に着くも迎え来ず。風が肌を刺す。月が白く水賊の肩に輝いている。ガレ場は注意しながら見望えのある小屋に歌声をあげる。結局先発も三十分早く到着したに過ぎなかつた。

- 信濃川上(八曲五)ー梓山(一〇〇〇)ー菅林着(一一一〇)ー晝食(一一三、三五一一、三〇)ー十文字峠頂(一二四五)ー大山(一三、四〇一三五)
- 武信白岩山(一三、三五一一三四五)ー三室山(一五〇五)ー甲武信ヶ岳(一六〇五)ー甲武信小屋(一六三五)

○二日 晴而曇

起承五時

△水賊山▽ 山腹を捲く。夏よりはしっかりと踏ま肌側水も切開かれていた。出発の遅いには時間的に弊になつてくる。破風山の傳答が美しく朝日に輝いている。富士もはつきりと浮び上つていて、笠雲がかかっている。午の午からの天気が危まる。三寸近くある霜を氣持よく踏んでかけ下る。

△破風山▽ 破風小屋跡に休んだ後、花のなり石菫花の路をわけて、一息に破風の頂上に立つ。朝日・国師・水賊・甲武信・三室の主脈が真直に見え、浅間守え山肌を見せている。とこのつた徑で歩き良い。一羊の若

癌がだんだんと山岳病の様子が見え出したので、荷物の半分を分解する。△種谷峠ーバラ平▽ 指導標多し。草稈のスロープの峠で晝食。岩壁の病状が重りたので雲取山への縦走を打切り全員本嶺へ下る事にする。奥々ど生える落葉松の葉は、最早無し。本嶺への径は沢通しになる。辺り少しく遅いが石菫花山脈を指導標にある新道通過不能必何争なく弊に通れるようになつてくる。或ひは風化した花前岩のガレ場を捲く。旧道よりは良いかも知れない。バラ平の日泉氏宅に寄り岩壁を覗かせてもらう。長崎村田を連絡にのこし夜道を出発。

△嶺山▽ 葉の條ボツリ／＼降り出したが、小降程度で止んだ。徳和から窪平をトラソクに昇つた一人の落伍者もなく無事嶺中着。

- 日泉氏宅に残つた箱は翌日蕪事晴京、若嶺も回復との事。
- △タイム▽ 小屋(八〇五)ー縦走路(八二五)ー破風小屋跡(九〇〇、九一〇)ー西破風(九四五)ー(一〇〇〇)ー東破風(一〇、二二一、三五)
- ー種谷峠(一一、二〇一、三〇)ー種谷峠(一一、四五一、〇五)ーバラ平(四三〇一六、二〇)ー三富(八四五九〇〇)ートラソクー窪平(九四〇)ー嶺山(一〇、四五)

(霧にまかれれば充分歩ける径であるたの行動のみを記す)

「后記」

一部の参加者によつては、本一に計画が無謀であるとの声もあつたが私と山行と共にした者が少数ではあるが、参加者が私よりも体格が優れていて箱ばかりでもあるので無理があるとは思はれなかつた。しかし決して良き山行であるとは云ひ得ない。これは私のパーティを編成に重大な落着かあつたからかも知れないが、針馬を半ばで放棄し且つ二重送のパーティを三分せぬばならなかつた事はそれの善悪は別として単に参加者の体力の考慮ばかりではなく、簡単な登山常識、殊に生活技術の考慮の大きいに論ぜられてしかるべきである。確かに本年度に至つて前例にならぬ進歩を上げた。しかし知識面がその向上に伴つていかうかは全く疑

向とする所だ。現在の様な白紙同様な所にわずかな墨が付いた程度で、尚も中山・高山への山行を続けるならば、まして二年ほどに亘るべき新制中卒者のみの部が、このような山行を続けるならば、それはとりかえしのつかぬ悲劇をもたらすであろう事は明らかである。

私は此所に部の行方を基礎に何ける事を云ひたり。基礎が拡大であつてこそ、新しい進歩が発見されるであろう。冬山が叫ばれるよりも、先づ基礎へ、フリダシへもどつてもらひたい。高尾山でも良い。高山山でも良い。そして共にのびて行かうではないか。その中に自然に親しまうとする新しい若き生命を発見したじ心のである。フアイト、フアイトこそ我々のかくべからざるものであり、反端こそ忘れてはならぬものである。この山行を頼み、そして強き反響を求めらるものである。(M・T)

◎団体登山部門東京予選(九月二十三、二十四日)塔ヶ岳集結中の离校の部、井沢主脈縦走に我部でも沢の四名が参加したが、成績は中のCであった。

山(塔ヶ岳) (静寂) 一 遊沢
コース 五瀬一長野一焼山一姫次岳一地蔵平(沼)一蛭ヶ岳一井沢

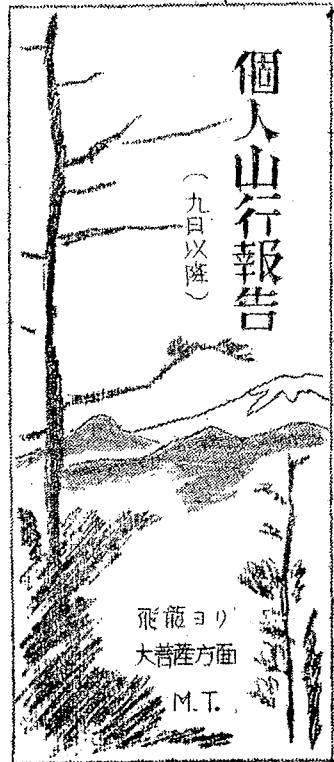
☆珍名法出現……

曰く
「T・N氏……(ドン)はシリで持つ、シリはドンで持つ」リユツクはシリで持つ

(集書帳)

個人山行報告

(九日以降)



飛龍ヨリ
大菩薩方面
M.T.

カク一谷

〔期 日〕 九月二二、二四日

〔参加者〕 L村田(20) 森沢(28) 名倉(25) 田中(将)(25) 仙田

才一日 曇

氷川(后九西五) 一 日鏡(一三〇五) 一 石山神社(三三二五) 野宿

才二日 晴后曇

神社(六二五) 一 カク一谷出合(六四五一七二〇) 一 杓子窪出合(七、五五) 一

二取(〇、〇一〇、四〇) 一 大滝(一〇、四五一二、〇〇) 一 天目山下(一三、〇〇) 一

一三、三〇) 一 仙元峠(一、〇五一三〇) 一 踊平(三三、三〇) 幕営

田中(将)のみ意用の為下山

踊平(三三、三五) 一 獅子口小屋(三三、四〇) 一 曲ヶ谷沢出合 一 川井(五三、三五)

才三日 雨

踊平 一 川苔山 一 鳩ノ巣

思ったより簡単でリスミカルに歩ける谷である。やはり小川谷本谷のよくな味だが、EJ初心者が多かつた為か下から杓子窪の間の藤下の一部を捲いたのが残念であった。大滝はすばらしいが何と云って水壘に乏しいのが最大の欠点であろう。一杯水は今年も水がない。仙元峠は旅橋を造るが雨前だけの展望が惜しい。

入笠山

〔期日〕 十月一日

〔参加者〕 (2A)神島、(2H)和久、(3C)高橋

〔コースタイム〕

青柳(六四〇)―一本松(七四〇七五五〇)―展望台(八〇五)―万年清水(八三五)―鐘打平(九二五)―入笠小屋(九三〇九五五)―入笠山頂(一〇、三〇一三、三五)―四辻(一三、三三、三五)―小梨平(一四、二五)―富士見駅(一五、四五)

入笠山は背部にアルプスをひかえ、前面に八ヶ岳の偉容を望む美しい山である。

雲取山

〔期日〕 十一月十一、十二日

〔参加者〕 (2E)田中実、(2F)鈴木

〔コースタイム〕

水川(一八〇)―鴨沢(一九三〇)―農家にて食事(一九五〇二〇三〇)―堂所(二、三五)―水場(三、三五)―ブナ坂(三、三三、三三、三三)―小雲取(三、四〇、〇、二五)―雲取山(二、二五)―山ノ家(二、四五)―出発(九、四〇)―雲取山(二、〇〇、一、〇、二〇)―ブナ坂(二、〇、五五)―セツ石山(二、二〇、二、二五)―千本ツツジ(二、二五、〇)―己、タノ大フヒレ(二、三、四〇、一、三、三五)―大ツ石山(二、四、三〇)―氷川(二、六、五五)

〔費用〕 三百十五円

キツネにつままれてゐるような夜道をひたすらに登り雲取山頂に立つたのは草水も凍るウシミツ時。翌朝立川高の某君と大フナで別れ我々はセツ石―大ツ石へと向つた。道は舊松の洞を抜け落葉をのみみゆけ巖壁を抜けて行くが、その中に豕俣極りない茅子の広連がある。

丹沢主脈縦走

〔期日〕 十一月二十六日

〔参加者〕 (2B)森沢、(2E)田中(将)、(2F)中野、(10)岩塚

〔天候〕 曇、一時あられ、吹雪、晴

〔コースタイム〕

新橋(三三〇)―蓮沢(三三五〇二四〇)―大倉(八〇五〇)―塔ヶ岳(三三五〇七二五)―丹沢山(八〇〇)―鬼ヶ岳(九〇)―蛭ヶ岳(九三〇)―地蔵平(一〇、三〇、一、二、二五)―姫次岳(二、三五)―横山(一三、五五、一、〇、五)―西野々(三二、〇、一、三三、〇)―牧馬(三三、〇)―手瀬(六三五)

霧氷の鳴る音に快歌を味ひながら塔ヶ岳の小屋に入り一寝りする。眼をさました時は丹沢の初雪、出発を一時間違らしたが止まないので吹雪を突いて出発、積雪五寸、霧氷が美しく輝く。丹沢山から蛭ヶ岳の間が最も風が強かった。最高峰蛭の降り噴からは風雪もおそろえ姫次岳付近ではコバルトに輝く大空に秩父の山々がみられた。

○補、水田号、仁人山行、ク教馬々

八ヶ岳スズメは秋川の沢にしては水量が豊富であり、あまりにも捨てるに惜しい谷の一つであり、又、小じんまりした所に愛すべき価値が充分にある。

F1(三米半)は左岸、F2(四米)ハング気味、とっつき悪く左岸上部へ逃げる。F3(二米)小滝落口左岸をへがりF4(三米半)が滝、が前方にかなり大きな釜を持っているために、近寄りず右岸のトラバーも良いが落口の草付きがよろい。左岸は落口に下れなりの右岸高橋が最速。ここからブルジュとより二米位の着滑が連続して美しい谷となり、F7を過ぎれば平和な絶谷となる。

尚、三瀧沢大滝への階級はボサボサしく、夏期は相当困難を感ずる。



詩二題

正 中野英司

一、十文字峠より甲武信岳

泉生林 泉生林 泉生林
泉生林 泉生林 泉生林
と二迄必読く

泉生林 泉生林 泉生林
泉生林 泉生林 泉生林

白楠花、石楠花、葉ばかりの石楠石
石楠花、石楠花、花のなり石楠石
石楠花、石楠花、背より高い石楠花

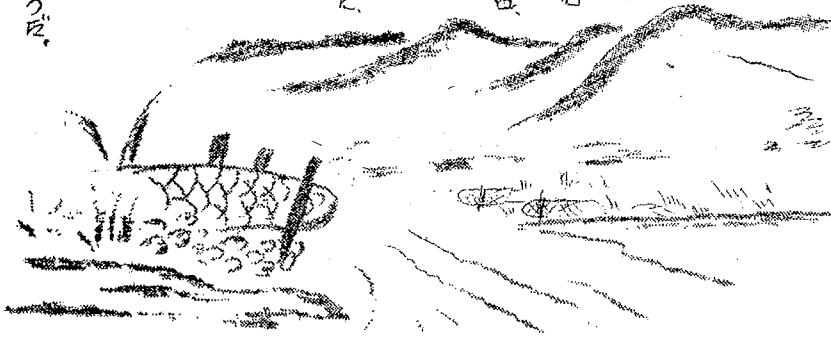
二 雁坂峠

うは、明るし峠だ、まぶしけ峠だ、
えーい、尻もちをつけ
サツクをほつり出せ

あ、腰がへった
飯だ、飯だ、飯だ

暖っころがろうぜ

このおたやかな スロープで
あ、暖かい、ぬむくなりそうだ、



NON SENSENCE

◇◇ 旧人山行袋取山の時の事、小袖の部屋で食事をさせてもらつたが、茶、サツマイモの大観迎、二ははすまぬと「少しばかりですよ」山へ行つて何も食物はありませんよ」と遠慮の仕方甚しい。とは云つもののリングを運りて歩く争し、暗の中に道が二分するのにパテマサテ？。もう一度引返して聞こうと当の家に引返すと、二ははしたり、弱肉強食の争ひ？。二伯のリングに一家八人立上るやう、引はるやう、口に押込むやう、髪をつかむやう……紛争教分尙止まず、ガラツと戸をあけると八人バサツと空す。突に何とも云えぬチーム・ワークにつくづく「サザエさん」の一喝喝を思はせた。(M・T)

○● 雁坂峠で水をくみに行つて来た丁・口の出まかせ云ひまかせ「い、小屋だぞー前にいけすがあつてママが放してあるんだ、おまけに、御自由におとり下さいッッて……隣間、マママ狂の陣の姿がいよう然と秩父側の泉生林へ消えた。Sの姿もなリ、T・Aも……やがて……おもむろに蓋食をおえて蓋板にかゝる頃、フウ頭に湯けをたて、登つて来た三人オコル争く……いとあゆみ、△▲オチ三回山行のアカくさり山男達の間に一人の文化人がいる……さう、Sです……、雁坂小屋キジ打場の壁に「候所で打つは文化人、道中で尻をまくるは野バン人」とあるとはSの言、お尻か痒のに行く人はありませんか。

○オプタ鼻、オプタ腰につけて自他共に許し決して他にゆづらぬN氏、焼山から下界に御降下されし祈天とのマツケ、尻皮壁に土地の農業者、口をそらえて、プター……、ササガの飯も大ロアングリ。

山を恐るる心、山へ登る目的、山に求めるもの等々何人によつて多少の異があると思ふ。山の高低の見方にしては同様と思はれるので、此所に一部意見を発表して貰つた(補遺)

○ PEAK の征服

正 鈴木輝夫

山に大自然を求め、自然に親しまうとする人は大伴低山を求めの程である。これに反して大自然を求め、山を征服して我物にしようとする気持を持つた人は低山から高山(北ア、南ア)に挑戦するのである。

私は高山趣味を好む。何故ならば現在の青年は山へ遊びに行くだけである。一部の人はを除けば假寺の山でなすいたずらは光日の谷川岳の草標の如き、間接殺人すらするのだ。我々は山へ遊びに行くよくな気持で登山してはならない。

昔人類が恐ろしいものかいると感じた中に登つた時の気持、それは、あの山を征服しようとする気持であつたろう。この気持を受けついで、我々も「山を征服」しようとする気持で登らねばならぬ。

山の高低の見方

○ ヒマラヤへの尾根

正 田中 実

文明の社会から逃れんとする私は真向から自然を愛する。しかし自然を超越した社会をどこかに見出すことが出来るだろう。否、不可能なことであるという事は私は低山と高山の限界を自然の中から找出することが出来なうがらう。

山に対して、完全なる人間性を持つたとき、高山においては社会より逃れんことにより真

○ 足もとに御注意

正 田中 將判

私の考えてゐるすべてを此所で打ちまけて論議を始めたいは無い。たゞ一つ私が高山主義の主張者でもなければ、低山論の容認者でもないと言ふ事を云ひたい。高山、中山、低山がどの様に区別されるかもはつきり知らない。山高きが故に技術を要するとか、高きが故に良とかは豈に疑問とする所である。アルピニストの登高技術も真に自然に対する

愛以外のものではなからば、無に等しいのである。低山の狭い道に容易さのみを求めて可とするものを除けば、すべての登山者に愛さねばならぬべき

の社会の美しさを知り、人間同士の友情を育てあげるのではないだろうか。……自然は低山を求めて人生を明るくし、高山を求めて山に生きんとすることにある。……。諸君、私は低山・高山の区別なく我々若き者に対する死への指導標を立てた山を求めて高山となし、且、それを好み、高尾山、丹沢山、雲取山、谷川岳、北岳、穂高等はいつか必ヒマラヤに通ずる最悪の尾根だと呼ぼうではないか。

ものである。我々の中にはスリルとか、緊迫感とか、征服感とか或ひは雄大な無比の展望美等の魅惑にあまりにも溺れ過ぎて、美の山を恐るる心の根本的なるものに気がつかずにいるのが多い。山頂に立ち、事成りたりとばかり「自然を征服した」と感へ、それを以つて結論と断する人は、もう一歩、振り返つて見るべきである。あまり、山頂を氣にして足元に気が付きませんか。

本年度記録集成

(二五年一月より)

部員二六名中の一部を除いた者の記録による。
 熊山行五回(内例会二三)を示し、昨年よりはるかに回数も山の方向
 もよまめつてゐる。

まず、カ一表を見て従来の変遷のみの活動から完全に脱してゐるこ
 とがわかる。

カ一表 月別 回数(は例会 日数員(雑属外部員のみ)

一	三	六	七
二	四(一)	四	八
三	五	五	六
四	七(三)	一〇	三三
五	五(一)	六	七
六	二	三	三
七	六(四)	二	一四
八	一三(三)	二	二〇
九	三(一)	六	九
十	三(一)	五	一三
十一	三	四	七

七月の回数が比較して小さいのは山行が大きいためで、八月に多いの
 は必つともな事であり、四月五月の天候の良し時に多く、六月の梅雨に
 少いのはうなづける。九月以降の急激なものは、二期制が原因している。
 カ二表の地域別表では、興多摩が依然カ一位奪のは、本校が中央縦沿
 線のためである。又興秩父に比較的中々此れは、季節的に過して
 いるものと見られる。

カ二表 地域別 回数 教員

興多摩	二二	四二
興秩父	八	三三
丹沢道志	六	一五
上越	六	一八
富士箱根	四	一一
湘南	三	一〇
北阿	二	一〇
南阿	一	三
その他	二	二

以上の如くになり、一人平均二・四回(最大一三)四日(最大一八日)
 一人一回平均一・八日(最大三・五)と、二のように時間的・季節的に
 恵まれてゐる事が明瞭に表れる結果が出てゐる。
 尚、この他、コース、タイム等詳細は備後誌

本年度の高度順位(実を下りぬ事であるが参考迄)

1 富士山	三三六米	富	士
2 槍ヶ岳	三一八〇	比	ア
3 大天井岳	二九	比	ア
4 西穂高岳	二九〇九	比	ア
5 燕岳	二七	比	ア
6 比叟干丈岳	二六〇〇	興	秩
7 金峰山	二五九五	興	秩
8 國師岳	二五九二	興	秩
9 朝日岳	二五八一	興	秩
10 三宝山	二四八三	興	秩

会計報告

係 中野英司

九月份

収入 会費 二四名(一人三〇円) 七二〇円

その他 八〇円

計 八〇〇円

支出 団体参加金へ廻す 三六〇円

フィルム一本 一六〇円

計 三五五円

残高 (十月へ繰越) 二四五円

十月分

収入 献金 二四五円

会費 二三名(一人四〇円) 八八〇円

計 一、一五五円

支出 カラビナ二ヶ 一八〇円

ハーゲン二本 九〇円

粟 二二〇円

字 二六〇円

時刻表 八〇円

テープ、その他 八〇円

糊 三〇円

ノート 三〇円

乗稿用紙 四〇円

インキ 二〇円

計 一、〇三〇円

残高 (十一月へ繰越) 九五五円

なお、くわしり事は係迄

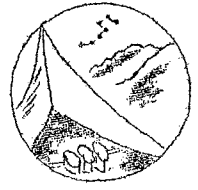
〇訂正 前号 興秩父主脈報告中、「頂にマブラがあり径が二分する」

に東破風とあるのは誤り、雁坂崎のこと。

川上	山	7:30
川上	山	9:40
川上	山	15:40
山	山	8:00
山	山	9:10
山	山	13:00
山	山	16:50

将監小室川真鶴氏によると、九月下旬建築着手
今年冬中に落成の見込

部員移動
 入部 看 二D 龜田 幸夫
 退部 看 三C 笹野 佐夫
 新委員紹介
 SLCL 田中 将利
 村田 博之
 山口 雄之
 中山 英司
 部報寄贈御礼
 都立立川高山岳部 敬
 江比高 敬
 豊多摩 敬
 大泉 敬
 九段 敬



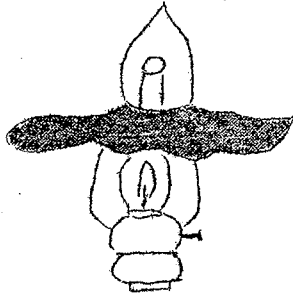
炉 辺

最近、国内外観光客の昂場から国立公園が各地に出来て来た。

この国立公園の利用層は何物であるかちよつと判らなすが、少くとも、土地固有の自然文物を永く保存し、国の名譽として内外に誇りつゝる施設たらしめようとする理想であることははつきりしている。しかし、この美名の施設の下に反つて自然や風物が汚染されたり、亡失したりすることゆゑは十分認識して厳重に監視しなくてはならぬ。

秩父多摩国立公園が去る八月、日本の十六番目の国立公園として指定された。……(中略)……

この公園には、夫々自然を楽しめようとする都会人向きの施設が計画されてゐるのは、大いに結構であるが、その方法、種類、適量などには多分に批判的な民間分子や役人階級が、首を突込んで非自然公園にする危険性が多分にある。ゆゑは自然を巧みにヒューマナイズすることが近代人の使命だと考へる。ゆきすぎた人倫の振舞ひこそ角を矯めて牛を殺す類である。(武蔵野オニ熊を写す)



あ と



自らの山男とうぬばれる天狗二人集つて編纂をしてみたものの、さうばり良い書物が得ばず、また、奇妙なものが出来てしまった。

（此れはまだ、低能があまりにも多すぎるとわかつたのなりことだ。文学的才能の少しでもにほつてゐる文が早く生まれたいのか。社会情勢は、びんくおだやかでなかり、我々もあんかんと山を採しむ事も出来なかりそつだ。 (H・N)

彷徨 才五号

——非虎品——

昭和二十五年十二月 日印刷
 昭和二十五年十二月十二日発行
 発行責任者 田 中 將 利
 編 集 中 野 英 司
 発行所 郡立西高等学校校山岳部
 東京都杉並区大宮前三〇二一
 電話 灰産(3)三一八六

山岳部通牒

窓外に見える峰々も、早くも新雪の装ひをもつて我々のおとす水るのを待つ季節となりました。それと共に夏山の想ひ出も又格別なものがありますので、反省会をも兼ねて、O.B.との夏山想ひ出の懇親会を行ひたいと存じます。出来ましたら、三十一日迄に出欠のほどをお知らせ下さい。

日時 一二月二十六日 后一時
場所 本校 教室

(都合により宿直室に変更の事あり)

会費 五〇円 (その他各自)

内容 懇話 反省 セツ
のケルン、その他有。

西高山岳部 O.B.
西高山岳部関係者 殿

